中世後期の物語研究
―「つまみ食い好きな女料理人」「雪の息子」―

加藤耕義、内堀淳志、草本晶、高瀬誠、平井敏雄

1　はじめに

本稿では、ルッツ・レーリヒ著『中世後期の物語と、現代に至る文学および民間伝承へのその影響』（Röhrich（1962）、以下：『中世後期の物語』）より、「つまみ食い好きな女料理人」と「雪の息子」を取り上げる。レーリヒの同書では、各説話の類話が多数挙げられているが、本稿では、両説話について簡単な解説をしたあとに、そのうちレーリヒが最初に挙げている中高ドイツ語テクストの精読と文法解釈を行う。

2 「つまみ食い好きな女料理人」について

2.1　ジャンルについて

H.-J. ウター著の『昔話国際話型カタログ』(ATU)では、この説話は「笑話とジョーク(ANECDOTES[1] AND JOKES)」という大項目の中の「聖職者と宗教に関わる人物に関するジョーク(Jokes about Clergymen and Religious Figures)」に分類され、「食べてしまった鶏と司祭の客(The Priest's Guest and the Eaten Chickens)」(ATU 1741)という話型名がつけられている。

参考として、『昔話国際話型カタログ』の話型記述を挙げておく。

1741 食べてしまった鶏と司祭の客

男(司祭)が客(聖職者)を食事に招いたので、妻(コック、メイド)に鶏(ガチョウ、ウサギ、魚)を2羽、調理するよう指示する。妻と妻の

1　ウターによる ATU のドイツ語原稿では „Schwank“ となっているので、ここでは「笑話」と訳す。

愛人はこっそり鶏肉を食べる(かじる)。食事の前に(最中に)、夫が切り盛り用の大きなナイフを研いでいると、妻は客に、夫はあなたの耳(睾丸)を切り落とすつもりだと言う。客は逃げる。妻は夫に客が鶏を持って行ったと告げる。夫は「1 つだけでもくれ!」と叫びながら客の後を追いかける [K2137]。参照:話型 1725。

いくつかの類話では、妻は客に、夫は客の尻にすりこぎを(口に火かき棒を)入れるつもりだと言う。夫は「少しだけでいいから、入れさせてくれ」と叫びながら追いかける。

2.2 類話の流布について

『メルヒェン百科事典』(EM Bd.10, S. 1308–1311)によれば、この説話はヨーロッパ、西南アジア、中央アジア、インド、北アフリカ、南アフリカ、北アメリカ、中央アメリカに広く流布する笑話で、西ヨーロッパにとりわけ文献記録が多い。

2.3 『中世後期の物語』で取り上げられている類話

レーリヒの『中世後期の物語』では、以下の 8 つのテクストが取り上げられている。

1) フリオルスハイムの男 (Der Vriolsheimer.) (13 世紀末)
2) ヨハネス・パウリ (Johannes Pauli: Schimpf und Ernst. Nr. 364.) (1522 年)
3) ハンス・ザックス (Hans Sachs: Sämtliche Fabeln und Schwänke, Bd. 2, Nr. 248.) (1559 年)
4) ヨハネス・フルスブッシュ (Johannes Hulsbusch: Sylva sermonum iucundissimorum.) (1568 年)
5) アンドレアス・シュトローブル (Andreas Strobl: Ovum Paschale Novum, oder: Neugefärbte Oster-Ayer, Das ist: Viertzig geistliche Discurs auff den Heil. stertag und Ostermontag.) (1710 年)
6) グリム兄弟 (Jacob und Wilhelm Grimm: Kinder-und Hausmärchen, KHM

77.）（1812 年）

7）南スラブの民間伝承（Anthropophyteia Bd. 1, Südslavische Volksüberlieferungen, hg. von Friedrich S. Krauss）（1904 年）

8）カバイル族の昔話（Volksmärchen der Kabylen Bd. I, hg. von Leo Frobenius, Nr. 28.）（1921 年）

2.4　語り手

本稿で取り上げたのは、1）の 13 世紀末のテクストである。このテクストの語り手については、129, 130 行目に「この嘘偽りない話は、フリオルスハイムの男が私たちに語ってくれたのですよ」と書かれている。レーリヒの解説によれば、「フリオルスハイムの男（Der Vriolsheimer）」というのはおそらくプフォルツハイム（Pforzheim）の南西にあるフリオルツハイム（Friolzheim）という村にちなんで付けられた名の吟遊詩人で、彼がこの物語を作ったものと推測される。

2.5　テクスト 1）の特徴

レーリヒの解説によれば、テクスト 1）はこの話型の本来的な特徴を 2 点備えている。1 つは、客である司祭とつまみ食い好きな妻が密通していることが暗示されている点である。夫は焼き上がるウサギ料理のためにナイフを研ぐが、司祭は夫が自分を狙っているのだと妻に言われて、自分が去勢されると思い逃げ出す。

密通していた男が去勢を怖れるモティーフは、古フランス語の韻文 «Dit des perdriz» にもあり、ファブリオーではよく見られるモティーフであるが、テクスト 2）のヨハネス・パウリの『冗談とまじめ』所収の「料理女が 2 羽のローストチキンを平らげたこと」には見られない。そこでは女料理人が客に、主人は客の両耳を切り落とそうとしていると伝える。

テクスト 3）のハンス・ザックスはヨハネス・パウリをもとに韻文化しているので、やはり耳を切り落とされると勘違いするモティーフとなっている。

テクスト 6）の『グリム童話』所収の「かしこいグレーテル」（KHM 77）

は、テクスト 5）のシュトローブルからの翻案であるため、こちらもやはり両耳を切り落とされると勘違いするモティーフである。グリム童話は子ども向けに語られているので、グリム兄弟が密通や去勢のモティーフがでてこないテクストをもととしたことは当然であろう。

もう 1 つの特徴は、客として招かれるのが司祭である点である。先に述べたとおり古フランス語の韻文 «Dit des perdriz» も同様であり、司祭が去勢を怖れるというモティーフはフランスのファブリオーではよく見られる。それに対し、ヨハネス・パウリに登場するのは「司祭」ではなく「客」であり、ザックスやグリムでも同様である。

したがって、たとえばグリム童話の「かしこいグレーテル」には、司祭は出てこないが、この話型のより古い類話では司祭が嘲笑の対象となる人物として登場するため、『昔話国際話型カタログ』では「聖職者と宗教に関わる人物に関するジョーク」に分類されている。

3 「つまみ食い好きな女料理人」対訳・註

	X. DIE NASCHHAFTE KÖCHIN	つまみ食い好きな女料理人
	(AT 1741; Mot. K 2137)	
	1. Der Hasenbraten	1. ウサギのロースト
	Ein ritter eines tages reit	ある騎士が、ある日馬に乗って、
	kurzewilen[2] an sin gejeit,	気晴らしのために、狩りに行きました。
	da er zwene hasen vienc.	そして、二匹のウサギを捕まえました。
	von siner künste daz ergienc[3],	自分の技で獲物をとらえることができ
5	sin geglücke er drane spurte[4].	て、騎士は幸せでした。
	die hasen er heim vuorte.	騎士はウサギを館に持ち帰り、
	er hiez si[5] im[6] bereiten wol.	上手に料理するよう命じました。する

2 kurzewilen：（＝kurzewîlen）「気晴らしをする」。ここでは rîten「馬で行く」と共に用いられて、「気晴らしに行く」の意。
3 ergienc：ergân「起こる・生じる」の過去形。「彼の技によってそのことは生じた」が直訳。
4 sin geglücke …：「彼はそのことについて幸せを感じた」が直訳。
5 si：複数 4 格形でウサギをさす。
6 im：再帰代名詞として用いられている。「自分のために」の意。

do sprach diu husvrouwe: «man sol	と奥方が言いました。「名付け親さんを
unser gevatern darzuo laden.	ご招待するのがよいでしょう。私達
10 gæze[7] wirz eine, daz möhte uns schaden[8].	だけで食べるのは、よくないでしょう。
wirtschaft süenet dicke haz[9].»	もてなしておけば敵はできませんよ。」
do sprach der wirt: «so schaff ez baz[10],	すると主人である騎士は言いました。
la dirz niht werden swære[11]!	「それがよかろう。お前のいいように
unser gevatern den pfarrære	しなさい。私達の名付け親の司祭様
15 wil ich darzuo biten komen.	に来ていただくよう、私がお願いしよ
der hat mich dicke her genommen	う。司祭様は、私をしばしばお屋敷に
enheim ze siner spise.	招いてご馳走してくださったのだ。
ich wære niht vil wise[12],	お返しをしなかったら、
solde ichz im niht wider tuon.	愚か者だということになろう。
20 daz lamp, schaf, gans, kitz, daz huon	子羊、羊、ガチョウ、子ヤギ、鶏を
heiz[13] bereiten und den antvogel!»	用意させなさい。それにカモもだ。」
Do wart diu wirtin so gogel	すると奥方はすっかり喜んで、
daz si darzuo komen bat[14]	姪と母方の叔母もすぐに呼びました。
ir niftel, muomen an der stat.	父方の叔母も呼びました。
25 si bat ir basen ouch darzuo.	それは、ある日曜の朝、
ditz geschach eins suntages vruo	主人が教会に行っている間のことでし
die wile der wirt ze kirchen was.	た。ウサギと野生の獣が狩られたのは、
des vordern tages gevangen der has	その前の日でした。これは本当の話で
was und daz wiltpræte.	す。奥方は言いました。「姪と叔母様方、
30 diu warheit diu ist stæte[15].	さあウサギを一匹食べてしまいましょ

7 gæze：gezzen（＝ezzen「食べる」）の接続法過去 1 人称複数形。本来の形は gæzen だが、人称代名詞 wir が後続する場合には、先行する動詞の末尾の -n はしばしば脱落する。Vgl. Paul（2007）, § M 70, Anm. 7.

8 daz möhte …：「それは私達に害を及ぼすかもしれない」が直訳。

9 wirtschaft …：「もてなしは、しばしば敵意を和らげる」が直訳。

10 so schaff ez baz：schaff「そうしなさい」という命令形が、baz「そのほうがよりよい」という比較級の副詞と共に用いられている。

11 la dirz …：「それがお前にとって嫌なことにならないようにしなさい」が直訳。

12 ich wære …：「私は大いに賢いというわけではないことになろう」が直訳。

13 heiz：heizen「命じる」の命令法 2 人称単数形。

14 daz si …：「彼女は来るように頼んだ」が直訳。

15 diu warheit …：「真実、それは不変である」が直訳。

si sprach: «muomen, niftel, basen,
nu gezze wir den einen hasen.
der wirt hat an dem andern gnuoc.
er und der techant[16] sint so kluoc
35 daz siz[17] wol kunnen vahen[18].»
do si den gazen nahen
do hiezs[19] den andern ouch dar tragen.
si sprach: «solde ich werden gar zeslagen[20],
im wirt der hasen nimmer niht[21],
40 swaz halt mir darumb geschiht[22].
vrouwen schimpf get dicke mannen vor[23].»
Innen des kam geriten an daz tor
der wirt und der pfarrære.
in dem huse vragte er mære
45 ob daz ezzen wære bereit[24].
diu vrouwe sprach mit kündekeit:
«ja, wie ir nu vor hunger veht[25]!
ir lat die diernen und den kneht
des morgens lange slafen.»
50 sus gunde si den ritter strafen.
si sprach: «ez ist noch niht so nahen[26],

う。主人にはもう一匹のほうで十分です。主人と司祭様は、とても賢いので、あの方達は他のものを捕まえられるでしょう。」
彼らがほとんどウサギを食べてしまうと、奥方はもう一匹も持って来るように命じて言いました。「もし私を打ち殺したとしても、あの人がウサギを取り返すことなどできないのですから。私をどうしようとも。女の楽しみはしばしば男達に優るのです。」そうしている内に、主人と司祭が門の所まで、馬に乗って帰って来ました。
館に入ると主人は、食事ができているかと尋ねました。奥方は言葉巧みに言いました。「まあ、お腹が空いたからといって、何と不機嫌なご様子でしょう。侍女や下男を朝いつまでも眠らせておくのは、あなたじゃないですか。」このように奥方は騎士を罵り始め、さらに言いました。「まだまだす

16 techant：「主席司祭」。
17 siz＝si ez.
18 vahen：（＝vâhen）「つかむ・とらえる」。
19 hiezs＝hiez si.
20 solde ich …：「たとえ私が完全に打ち殺されてしまったとしても」が直訳。
21 im wirt …：
– 「ウサギは二匹とも全く彼のものにはならないのだから」が直訳。
– der hasen：複数 2 格形。
22 swaz halt mir …：「この件に関して私に何が起ころうとも」が直訳。
23 vrouwen schimpf …：
– 「女達の楽しみはしばしば男達に先行する」が直訳。
– schimpf：「楽しみ」の意。
– mannen：複数 3 格形。
24 vragte er mære …：「食事ができているかどうかについての話を訊いた」が直訳。
25 veht：vêhen「憎む・敵意を抱く」の 2 人称複数現在形。

ir muget sin niht ergahen[27],
ir müezt noch langer biten.»
an der husvrouwen siten
55 satzte man den pfaffen[28].
der wirt hiez im[29] trinken schaffen,
wan er was zorneclich gemuot.
er tet als noch ein man tuot
den hungert und hat spise dehein.
60 er zoch uz einen wetzestein.
sin mezzer gunde er wetzen.
er wolde sich schiere setzen[30].
Do der pfaffe daz gesach,
zuo der vrouwen er do sprach:
65 «vil liep gevater, saget mir
durch got[31] unde wizzet ir:
wes ist der wirt so ungemuot?»
si sprach: «wizzet ir wes er daz tuot?»
«triuwen», sprach er, «nein ich.» —
70 «man hat iuch unde mich
gezigen[32] daz wir han getan.
wir soldenz billich han verlan[33].
ir sit gegen im belogen[34].»
do gunde er gein der türe zogen.
75 er sprach: «mir ist ein teil ze heiz.»

ぐにはできませんよ。急いだってありつけませんよ。あなたはまだ長いこと待っていなければなりません。」
奥方の隣に司祭の席が設けられました。主人は飲み物を用意するよう命じました。主人は腹を立てていましたので、空腹で食べ物がない人が、今でもするのと同じようにしました。砥石を取り出して、ナイフを研ぎだしたのです。主人はすぐに食事を始めたかったのです。司祭はそれを見ると、奥方に言いました。「愛する名付け子よ、頼むから聞かせておくれ。ご主人がなぜこんなに不機嫌なのか、分りますか？」
奥方は言いました。「なぜあの人があんなことをしているのか、ご存じですか？」
「全くもって分かりません」と司祭は言いました。「あなたと私がしたことについて、皆がとやかく言ったのです。私達はそんなことはすべきでなかったと。あなたに関して、嘘の申し立てがあの人に対してなされたのです」。
すると、司祭は戸口の方へ行って、言いました。「どうも少し暑すぎるな。」

26 ez ist …：「それはまださほど近づいていない」が直訳。
27 ir muget …：「それに急いで追い付くことはできない」が直訳。
28 satzte man …：「人は司祭をすわらせた」が直訳。
29 im：再帰代名詞として用いられている。「自分のために」の意。
30 er wolde …：「すぐに座ろうと（＝食卓につこうと）した」が直訳。
31 durch got：「神かけて、後生だから」の意。
32 gezigen：zîhen「咎め立てをする」の過去分詞形。
33 wir soldenz …：「私たちはそれをやめるのが当然であったと」が直訳。
34 belogen：beliegen「（4 格の人に関して）虚偽を述べる」の過去分詞形。

er gedahte: «mir geschiht liht, gotweiz,
als mangem pfaffen ist ergan
der verholne minnet sunder wan[35].
davor sol mich got bewarn.
mac aber ich daz undervarn[36],
so geschiht mir hie niht pfaffen reht.»
uf sin pfärt gesaz er ane kneht.
dannen drabete er vil kecke.
Tischlachen unde becke
brahte ein kamerære dar,
ein tischlachen wiz gevar,
von bilden vil ahtbære.
«wa ist min gevater, der pfarrære»
sprach der wirt, «hin bekomen?»
diu vrouwe sprach: «er hat genomen
die hasen bede und ist dahin.» —
«triuwen» , sprach der wirt, «den sin
prüeve ich niht vür werdekeit[37].»
des wirtes pfärt was ouch bereit.
er sprach: «er læt si hie[38], weizgot[39]!
vüerte er si hin, daz wære ein spot[40].
man hæte mich vür einen affen[41].»
do rante er nach dem pfaffen.
do er in verrest ane sach,
er rief lute unde sprach:

司祭は考えたのです。「ひそかに愛に
ふけった多くの司祭達の身に起こった
ことが、どうやら私にも起こると見え
る。神よ、私をお護りください。
そうかと言って、争ったりすれば、
いずれにせよ、司祭の身にふさわしく
ない事態になってしまうだろう。」
司祭は従者もつれずに馬に乗ると、大慌
てで駆け去って行きました。侍従が
ナプキンと鉢を持って来ました。
ナプキンは白く、
大変立派な見ばえのするものでした。
「名付け親の司祭様はどこへ行ってし
まったのかな？」と主人は言いました。
奥方は言いました。「ウサギを二匹とも
取って、出て行ってしまいました。」
主人は言いました。「それは全く、褒め
られた行動とは思えないな。」主人の馬
も用意ができていました。主人は言いま
した。「とにかく、ウサギは置いて行っ
てもらわなければ。持って行ってしまう
なんていうのは、ひどい侮辱だ。私は猿
にも等しい笑いものになってしまう。」
主人は司祭を追いかけました。遠くから
司祭を見つけると、大声で叫んで言いま

35 sunder wân：「疑いもなく」の意。
36 undervarn：「そらす・妨げる」の意。
37 triuwen …：「まことに、その考えを私は立派な行為とは見なさない」が直訳。
38 er læt …：「彼はそれら（＝ウサギ）をここへ置いて行くのだ」が直訳。
39 weizgot：「本当に」の意。
40 vüerte er …：「彼がそれを運び去ってしまうとしたら、それは侮蔑になるだろう」が直訳。
41 man hæte …：「人は私を猿と見なすであろう」が直訳。

«weizgot, ir lat si bede[42] hie!»
der pfaffe des gaher loufen lie.
er sprach: «ich entuon, ob got wil.
mir wart nie erteilt sulh spil[43].
ez ist gar ane die schulde min.
ich wande ir soldet min vriunt sin.
desn ist niht, daz sihe ich wol.
ichn weiz niht wa ich mich hüeten sol.»
«eia, so lat mir doch den einen!»—
«nein ich, triuwen, keinen,
die wile ichz wol erwenden mac[44].»
Sin kirche im so nahen lac,
daz er den vrithof gewan.
wie balde er in die kirche entran!
die sloz er vaste nach im zuo.
do bedahte sich der ritter duo,
do er sin niht mohte ergrifen,
do lie er zorn entslifen.
von dannen er do kerte.
sin zuht er damit erte[45].
er reit heim unde saz
und hiez im vür tragen und az
die spise die er mohte han[46],
unz daz er het sin zorn verlan

した。「後生だから、両方とも置いて行きなさい！」すると司祭はさらに早く馬を走らせました。司祭は言いました。「神かけて、そんなことはできません。私には全く関わりのないことです。私に全く落ち度はないのです。あなたは私の友人だと思っていましたのに。そうでなかったということが、よく分りました。どこへ逃げ込んだらよいものか、全くわからない。」「いいから、とにかく一つだけでも置いて行きなさい！」「いえ、本当に、それはできない相談です。可能な限り逃げ続けます。」司祭の教会がその近くにありましたので、彼は墓地に駆け込むことができました。何と素早く司祭は教会の建物へ逃げ込んだことでしょう。背後で扉に堅く鍵をかけました。司祭を取り逃がしてしまった騎士は、よくよく考えて怒りを鎮めました。騎士はそこから引き返しました。これで騎士は礼節で名を揚げました。彼は館に戻り席につき、その時用意することができた食事を持って来させて、それを食べました。するとついにはすっかり怒りを忘れ、ウサ

42 si bede：姦通者は去勢されるという刑罰があった。si bede「それら両方」を、騎士はウサギのつもりで言っているが、司祭には自分の睾丸のことと聞こえるのである。
43 mir wart …：「そのような楽しみは私には決して与えられなかった」が直訳。
44 die wile …：
– 「私がそれをよく持ち去ることができる限りは」が直訳。
– erwenden：「引き返させる・そらせる・持ち去る・奪う」の意。
45 sin zuht …：「彼はそれによって自分の礼節を名誉あるものとした」が直訳。
46 die spise …：「彼が得ることができた食事を」が直訳。

125 und daz er rehte inne wart
umb die hasen und umb des pfaffen vart.
er sprach: «ja, vrouwe, schimpf ist guot
so man in ane zorn tuot[47].»
Ditz ungelogen mære
130 machte uns der Vriolsheimære.

ギの件と司祭の逃亡についての、真実に気づきました。騎士は言いました。「なるほど妻よ、怒りにかられていない時なら、おふざけもまたよいものだな。」この嘘偽りない話は、フリオルスハイムの男が私たちに語ってくれたのですよ。

4 「雪の息子」について

4.1 ジャンルについて

H.-J. ウター著の『昔話国際話型カタログ』では、この説話は「笑話とジョーク(ANECDOTES AND JOKES)」という大項目の中の「夫婦に関する物語(Stories about Married Couples)」に分類され、「雪の子(The Snow-Child)」(ATU 1362)という話型名がつけられている。

参考として、『昔話国際話型カタログ』の話型記述を挙げておく。

1362 雪の子ども (Modus Liebinc)

商人の妻が夫の留守中に子どもを生む。夫が帰って来ると妻は、雪(つらら)を食べたら妊娠したと説明する。夫はその子を息子として受け入れるふりをする。

男の子が大きくなると、父親は男の子を旅に連れて行き、売る。あとで夫は妻に、男の子は溶けて、しずくとなって海に落ちたと説明する [J1532.1]。

4.2 類話の流布について

『メルヒェン百科事典』(EM Bd.12, S.126–129)によれば、この説話は中世以来ヨーロッパに流布している。

この説話の文献上残っている最古のテクスト(10〜11 世紀)は、作者不詳で

47 schimpf ist …:「人が怒りなしに行う時には、おふざけというのはよいものである」が直訳。

ある。ヴォルフェンビュッテル写本（Wolfenbütteler Handschrift）とケンブリッジ歌謡集（Cambridger Liederhandschrift）に収められている。この物語は „Modus Liebinc“ と呼ばれ、メロディを伴って広く流布していたが、そのメロディは現在までに残っていない。

4.3 『中世後期の物語』で取り上げられている類話

レーリヒの『中世後期の物語』では、15のテクストが取り上げられている。数が多いので個々には挙げないが、3つめに挙げられているのが、上で述べたラテン語の最古のテクスト Wolfenbütteler Pergamenthandschrift で10世紀のものである。このテクストでは仕返しをする夫はシュヴァーベン人（Schwäblein［Suevulus］）である。『メルヒェン百科事典』によれば、これはシュヴァーベン人が筋の担い手として登場する最古の例でもある。後の中世後期の類話では、特定の土地と結びつけられていないか、またはヴェネチアが舞台となっている。

本稿でとりあげた1番目のテクストは、レーリヒによるとおそらく13世紀に中部ドイツで成立したもので、数多くの写本に収められている。このテクストに対してレーリヒは、プファイファー版（Das Schneekind 1）、フォン・デア・ハーゲン版（Das Schneekind 2）、ローゼンハーゲン版（Das Schneekind 3）の3つの刊本を挙げている。フォン・デア・ハーゲンは、この説話をシュトリッカー由来とし、ローゼンハーゲンも「シュトリッカーによる説話（Mären von dem Stricker）」というタイトルの刊本に、この説話を納めているが、レーリヒは、このテクストがシュトリッカーに由来するというのは疑わしいとしている。その他に有名なものとして、6番目のヨハネス・パウリの『冗談とまじめ』（Nr. 208）のテクスト、7番目のハンス・ザックスのテクストが挙げられている。

ラテン語の最古のテクスト „Modus Liebinc“ をのぞけば、いずれも教訓が最後に付けられていることは注目に値すると『メルヒェン百科事典』は指摘している。本稿で取り上げたテクストでは「妻に欺かれていて、仕返しをしたいとか、はかりごとをもって、はかりごとを覆したいと考えている夫にとっては、

この話は大いなる教訓となるでしょう。というのも、皆さんがこれまでしばしば耳にしてきた通り、妻たちはたくらみによって、とても多くの夫たちを負かしてきたのですから」という教訓で終わっている。ヨハネス・パウリのテクストでは、「このように夫婦というのはお互いをだまし合うものなのです」となっている。またハンス・ザックスでは「それゆえ、遠く旅に出る時には、夫は妻が彼のためにつららを食べないように注意すべきだ」と暗示的に教訓をつけている。

4.4　テクスト 1）の特徴

『メルヒェン百科事典』には、テクスト 1）では雪の子は嵐の海で濡れて水に溶けたと夫が妻に説明することが特徴的であると指摘されている。たとえばヨハネス・パウリのテクストでもハンス・ザックスのテクストでも、船の上で太陽の日差しにより溶けたと夫が妻に説明する。

5　「雪の息子」対訳・註

XI. DAS SCHNEEKIND	雪の子
（AT 1362; Mot. J 1532.1）	
1. Des snêwes sun	1. 雪の息子
Ez het ein koufman ein wîp,	ある商人に妻がおりました。
diu was im liep als der lîp[48].	自分の命と同じくらい、商人は妻を
er wær ir liep, des jach[49] ouch sie,	愛していました。妻もまた、彼のことが
ie doch gewan ir herze nie[50]	好きだと言ってはいたのですが、
5 die wârheit darinne,	しかしそれは偽りでした。

48　diu was …：
- 「奥さんは彼にとって命と同じくらい好ましいものであった」が直訳。
- als＝alsô. 同等比較を表す。
- wîp：「婦人・妻」は中性名詞だが、自然の性別に従って、diu という女性形の指示代名詞でうけている。

49　jach：jehen「言う」の直説法過去形。2 格支配。

50　ie doch …：「しかし彼女の心は決してその言葉の中に真実を得なかった」が直訳。

	daz wâren valsche minne.	それは、真実の愛ではなかったのです。
	ez geschach bî einen zîten,	ある時次のようなことが起こりました。
	niht langer wolde er bîten[51],	商人はもはや家に留まってはいられず、
	von sînem hûse vuor er	商品を携え、利益を得ようと、
10	mit koufe durch gewinnes ger[52].	家から出かけて行きました。
	er huop sich uf des meres fluot[53],	今でも多くの商人がそうするように、
	als noch manic koufman tuot.	海へと漕ぎ出しました。
	dâ quam er in ein fremdez lant	すると見知らぬ国に着き
	dâ er guoten kouf inne vant[54].	そこで商売がうまく行きました。
15	er beleip durch gewinne[55]	儲けが得られたので、
	driu jâr darinne	彼はその国に三年間とどまり、
	daz er nie wider heim quam	四年目が終わったとき、
	unz daz vierde jâr ein ende nam[56].	やっと家へと戻って来ました。
	sîn wîp in minneclîche emfienc,	妻は彼を愛情深く出迎えました。
20	ein kindelîn mit samt ir gienc.	一人の子供が彼女と一緒について
	dô vrâgt er der mære	来ました。商人は、これは一体
	wez daz kint wære.[57]	誰の子か、と尋ねました。妻は言いました。「あなた、私はあなたが恋しかったのです。そこで庭に出て、雪を少し口に含んだのです。すると私はあなたの愛を感じたの。そこでこの子を授かったのです。この子はあなたの子供です。本当よ。」「そうだな、全くお前の言う通
	si sprach: «herre, mich geluste[58] dîn.	
	dô gienc ich in mîn gärtelin,	
25	des snêwes[59] warf ich in den munt.	
	dô wurden mir dîn minne kunt[60],	
	dô gewan ich ditze kindelîn:	
	ze mînen triuwen, ez ist dîn.»	

51 niht langer …：「それ以上待っていようとは思わなかった」が直訳。
52 durch gewinnes ger：「利益の欲求のために」が直訳。
53 er huop sich …：「彼は海の波の上へと出発した」が直訳。
54 dâ er …：「そこで彼は良い商売を見つけた」が直訳。
55 durch gewinne：「儲けのために」が直訳。
56 daz er …：「四年目が終わるまで、彼が家へ戻って来ることは決してなかった」が直訳。
57 dô vrâgt …：
– 「彼はこの子供が誰のものかということについての話を訊いた」が直訳。
– vrâgt＝vrâgte（直説法過去形）。vrâgen は「（4 格の人に 2 格のことを）尋ねる」。
58 geluste：gelusten の直説法過去形。非人称で「（4 格の人に 2 格のものを）求めさせる・恋しがらせる」の意。
59 des snêwes：部分の 2 格。
60 dô wurden …：「すると私にあなたの愛が知らされたの」が直訳。

«Jâ, mahtû[61] vil wol wâr hân,	りなのだろう。私たちはこの子を育てる
30 wir suln ez ziehen!» sprach der man.	としよう。」と商人は言いました。
ern brâhte si des niht inne[62]	彼には、妻の愛が偽りであることが
daz er valscher minne	わかっていましたが、
an ir was worden gewar[63]	その後十年以上にわたって、相手には
unz darnâch über zehen jâr.	それを一切気づかせなかったのです。
35 er lêrte daz kint under stunden	彼は折にふれて子供に、
mit habechen und mit hunden,	鷹や犬、チェス盤や狩猟用の猛禽を
mit schâchzabel und mit vederspil,	用いたさまざまな遊びを教え、
maniger hant freuden vil,	また節度をもって話すことや、
mit zuhte sprechen und swîgen,	沈黙すること、
40 harpfen, rotten[64] und gîgen	ハープやツィターやヴァイオリン、
und aller hande seitenspil	その他あらゆる弦楽器の弾き方や、
und ander kurzwîle vil.	さらに多くの娯楽を教えました。
er gebôt aber daz sîn knehte	さて彼は再び、召使たちに、以前と
diu schef bereiten rehte	同じように船に食料を積んで
45 mit spîse nach dem alten site[65].	用意するよう命じました。
des snêwes sun fuort er mite.	雪の息子も一緒に連れて行きました。
er huop sich uf daz wilde mer.	彼は荒れた海に漕ぎ出しました。
die ünden flugen in entwer,	波が飛ぶようにあちこちへ彼を運んで、
sie sluogen in in ein schœne lant[66]	ある美しい国へ着きました。そこで
50 dâ er einen rîchen koufman vant,	彼は一人の裕福な商人を見つけました。
der vrâgt in sâ der mære	その商人はすぐに彼に尋ねました。
wâ sîn koufschatz wære.	あなたの商品はどこにあるのですか、と。
des snêwes sun wart dâ für gestalt[67],	雪の息子がそこへ引き出されて、

61 mahtû＝maht du.
62 brâhte … inne：inne bringen「(4 格の人に 2 格のことを) 知らせる・気づかせる」。
63 was worden gewar：「(2 格のことに) 気づいていた」は過去完了形で書かれている。「すでに知っていた」という意味。
64 rotten：「プサルテリウム (中世のツィター型撥弦楽器) を弾く」。
65 nach dem alten site：「古いやり方に従って」が直訳。
66 sie sluogen …：「波が彼をある美しい国へと打ちあげた」が直訳。
67 gestalt：stellen の過去分詞形。vûr stellen で「前に置く・据える」。

	mit drin hundert marken er in galt[68],	三百マルクで売れました。
55	daz was ein grôzer rîchtuom,	それは大した儲けでしたし、
	ouch het er des vil grôzen ruom	さらに彼は、この件で騙されず、
	daz er daran niht was betrogen	むしろ愚かな息子をうまく騙した
	daz er daz gouchelîn het gelogen.	ということで、大いなる名声も
	der schatz brâht im in sînen gewalt[69]	得ました。このお金は彼に
60	daz im zwir als vil galt.	倍の儲けをもたらしたのでした。
	Nû beleip er niht langer dâ,	さて商人はそれ以上その場に留まらず、
	mit freuden fuor er heim iesâ.	大喜びで急いで家に戻りました。
	sîn hûsfrowe gegen im gienc,	妻がやって来て、
	minneclîche sin emphienc[70].	愛情深く彼を迎えました。妻は尋ね
65	si frâgte in: «wâ ist daz kint?»	ました。「あの子はどこですか？」
	er sprach: «mich sluoc der wint	商人は言いました。「あちらからも
	beidiu hin unde her,	こちらからも風が叩きつけるように吹い
	uf dem wilden mer enwer.	てきてな、荒れた海の上であちこちから
	des wart daz kint naz al dâ	な。それであの子はずぶ濡れになって、
70	und wart ze wazzer iesâ.	あっという間に水になってしまったん
	wande ich het von dir vernomen	だ。あの子は雪から授かった、と
	daz er von dem snêwe wære bekomen.	お前から聞いていたからな。
	ist aber daz wâr, daz ich hœre sagen[71],	だが、私が聞いた話が本当なら、
	sône darft dû in niemer geclagen	あいつの事を嘆く必要など全くないのだよ。
75	dehein wazzer vlieze sô sêre	どんなに遠くへ流れた水だって、
	ez enhabe die widerkêre	一年もしないうちに、
	innerhalbe jâres frist[72]	流れ出たもとの所へ戻って来るそうだからな。

68 mit drin hundert…
- 「彼（＝異国の商人）は彼（＝雪の息子）を三百マルクで買った」が直訳。
- galt：gelten「（4格のものを）贖う、買う」。

69 brâht im in sînen gewalt: im in sînen gewalt bringen：「彼の自由にさせる＝彼のものにする」の意。

70 emphienc：＝empfangen「迎え入れる」の3人称単数過去形。2格支配。

71 ist aber …：「語るのを私が聞いたことが本当なら」が直訳。

72 dehein wazzer …：
- 「どんな水も、一年以内に戻って来ないほどひどく流れて行きはしない」が直訳。
- vlieze：vliezen「流れる」の接続法現在形。
- enhabe：否定の副詞 en＋haben の接続法現在形。

	ze dem urspringe dannen ez komen ist[73].	だから私を信じなさい。
	sô solt ouch dû gelouben mir	あの子はすぐにまたお前の中へ、
80	ez vliuzet schiere wider in ze dir.»	流れて戻って来るだろうよ。」
	Sus het er widernüllet	こうして彼は、欺かれたことへの
	daz er was betrüllet.	仕返しをしたのです。
	swelh man[74] sich des bedenket	妻に欺かれていて、仕返しを
	ob in sin wîp bekrenket	したいとか、はかりごとをもって、
85	daz er den schaden widerstürzet[75]	はかりごとを覆したいと考えている
	und mit listen liste lürzet[76],	夫にとっては、この話は大いなる教訓
	daz ist ein michel wîsheit[77],	となるでしょう。というのも、皆さんが
	wan diu wîp hânt mit karkheit	これまでしばしば耳にしてきた通り、
	vil manegen man überkomen	妻たちはたくらみによって、とても多く
90	als ir ê dicke habet vernomen.	の夫たちを負かしてきたのですから。

参考文献

Text

Röhrich（1962）　Röhrich, Lutz: Erzählungen des späten Mittelalters und ihr Weiterleben in Literatur und Volksdichtung bis zur Gegenwart, Sagen, Märchen, Exempel und Schwänke, Band 1, Francke Verlag, Bern und München, 1962.

Der Hasenbraten 1　Hagen, Friedrich Heinrich von der/Simon, Werner/Boeters, Max/Schacks, Kurt/Niewöhner, Heinrich: Neues Gesamtabenteuer, das ist, Fr. H. von der Hagens

73　dannen ez …：
–「それ（＝水）がそこから来た場所へ」の意。
– kommen ist：kommen は過去分詞形。kommen ist で現在完了形。

74　swelh man：「そういう男は誰でも」が直訳。

75　den schaden widerstürzet：「損害を覆す」が直訳。

76　lürzet：lürzen「欺く・騙す」。

77　daz ist …：「これは大いなる知恵である」が直訳。

Gesamtabenteuer in neuer Auswahl: die Sammlung der mittelhochdeutschen Mären und Schwänke des 13. und 14. Jahrhunderts, Weidmann, Dublin, 1967, Bd. 1, Nr. 16, S. 61ff.,

Der Hasenbraten 2 Hagen, Friedrich Heinrich von der: Gesamtabenteuer, Hundert altdeutsche Erzählungen (in drei Bänden), Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1961, Bd. 2, Nr. 30, S. 145–152.

Das Schneekind 1 Pfeiffer, Franz (hg.): in: Zeitschrift für deutsches Altertum, 7, 1849, S. 377–380.

Das Schneekind 2 Hagen, Friedrich Heinrich von der: Gesamtabenteuer, Hundert altdeutsche Erzählungen (in drei Bänden), Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1961, Bd. 2, Nr. 47, S. 379–385.

Das Schneekind 3 Rosenhagen, Gustav (hg.): Mären von dem Stricker, Altdeutsche Textbibiothek 35, Max Niemeyer Verlag, Halle, 1934, Nr. 7, S. 52–54.

Sekundärliteratur

ATU Aarne, Antti/Thompson, Stilth/Uther, Hans-Jörg: The Types of International Folktales, A Classification and Bibliography, Suomalainen Tiedeakatemia Academia Scientiarum Fennica, Helsinki, 2004.

Grimm（1968） Grimm, Jacob: Deutsche Mythologie, Akademische Druck u. Verlagsanstalt, Graz, 1968.

EM Ranke, Kurt/Brednich, Rolf Wilhelm/Bausinger, Hermann/Brückner, Wolfgang/Gernt, Helge/Röhrich, Lutz/Roth, Klaus/Köhler-Zülch, Ines/Marzolph, Ulrich/Shojaei Kawan, Christine/Uther, Hanz-Jörg:

Enzyklopädie des Märchens, Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung, Band 10 und 12, Mit Unterstützung der Akademie der Wissenschaften zu Göttingen, Walther de Gruyter Verlag, Berlin, New York, 2002, 2007.

Paul（2007） Paul, Hermann/Klein, Thomas/Solms, Hans-Joachim/Wegera, Klaus-Peter/Schröbler, Ingeborg/Prell, Heinz-Peter: Mittelhochdeusche Grammatik, 25. Auflage, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 2007.

Stammler（1980） Stammler, Wolfgang/Langosch, Karl/Wachinger, Burghart/Keil, Gundolf/Schröder, Werner/Worstbrock, Franz Josef/Ruh, Kurt/Stöllinger-Löser, Christine: Die deutsche Literatur des Mittelalters, Verfasserlexikon, zweite, völlig bearbeitete Auflage, Band 2, Walter de Gruyter Verlag, Berlin, New York, 1980.

Wörterbücher

BMZ Benecke, Georg Friedrich/Müller, Wilhelm/Zarncke, Friedrich: Mittelhochdeutsches Wörterbuch. Mit Benutzung des Nachlasses von Georg Friedrich Benecke, ausgearbeitet von Wilhelm Müller und Friedrich Zarncke. Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854–1866 mit einem Vorwort und einem zusammengefaßten Quellenverzeichnis von Eberhart Nellmann sowie einem alphabetischen Index von Erwin Koller, Werner Wegstein und Norbert Richard Wolf, 5 Bände, S. Hirzel Verlag, Stuttgart, 1990.

Grimm Grimm, Jacob/Grimm, Wilhelm: Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm, 33 Bände, Verlag von S.

Hirzel, Leipzig, 1854–1971, Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 1984.

Kluge（2002） Kluge, Friedrich/Seebold, Elmar: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache, 24., durchgesehene und erweiterte Auflage, Walter de Gruyter Verlag, Berlin/New York, 2002.

Lexer Lexer, Matthias: Mittelhochdeutsches Handwörterbuch. Zugleich als Supplement und alphabetischer Index zum Mittelhochdeutschen Wörterbuch von Benecke-Müller-Zarncke. 3 Bände, Neudruck der Ausgabe 1872–1878 Leipzig, mit einer Einleitung von Kurt Gärtner, S. Hirzel Verlag, Stuttgart, 1992.

Lexer, Taschenwb. Lexer, Matthias: Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch, S. Hirzel Verlag, Stuttgart, 1986.

Paul（2002） Paul, Hermann/Henne, Helmut/Kämper, Heidrun/Objartel, Georg: Deutsches Wörterbuch, Bedeutungsgeschichte und Aufbau unseres Wortschatzes, 10. überarbeitete und erweiterte Auflage, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 2002.

（附記） 本研究は、学習院大学外国語教育センター 2013 年度特別研究プロジェクト「中世後期の物語研究 III」の成果である。